

臨床検査診断学

編集 山 中 學 東京大学教授

熊 原 雄 一 大阪大学教授

川崎医科大学教授

柴 田 進

東大の山中學教授と阪大の熊原雄一教授が手をとりあって「臨床検査診断学」を医学書院から新しく上梓された。この書物はおよそ60名のわが国におけるもっとも活動力の大きい気鋭の士の協同執筆になるもので、その中には私が臨床病理学の領域でいろいろお世話になったり、はげまし合って進んできた仲間が沢山いらっしゃるの、そのできばえには特に関心をもって通覧させていた。

一口にいて非常に内容豊富で多方面にわたっており、この書物一冊を読みこなしていれば基礎医学（生理学、生化学）にしろ、臨床医学（ことに内科学）にしろ、臨床家になるために最低限度必要な基本知識を身につけることができると感じた。

本書は“病態生理と検査”（約350頁）および“主訴と症状から検査へ”（約250頁）の2部に大別されている。

最近、いわゆる基礎医学といわれる臨床医学とを組み合わせ、医学教育をいかに学生の理解しやすいものにして教育すべきか、真剣に考慮されており、一部の新しい医科大学ではブロックシステム——例えば6年一貫コースで3年生において代謝、炎症、新生物、生長、老化などの一般的現象の概念を与えるため、これまでの病理、細菌、内科などに分科している学問内容のわくをゆるめて、互いに再編成して予備知識を与えておき、その後において4年生に臓器別教育コースをとらず——を採用しようと努力している。その時に大きい問題として浮かび上がってくるのは“一体何を教えたらよい

か”ということである。それは殊に基礎医学を担当している教員の側にこの点について迷いが見られる。

本書はそれに答え得る書物の1つとして推奨したい。ブロックシステムを採用する時、いわゆる基礎医学の教員の方々がどの程度まで力を臨床医学教育に貸して下さることが必要であるかがおわかりいただけると思う。

もともと臨床医学が基礎医学の知識と技術で重武装をしないと現代の診療レベルを維持できないことに松本彰学長が気づかれたことが動機で、25年前に山口県立医大に臨床病理学の講座が開設されたのである。不幸にもこの教室はその後苦難の道を歩みつづけたが、これがつくられたために国立大学では、専任教授によって統率された中央検査部が置かれることになり、私立医大の多くが臨床病理学教室を設けるようになったのである。これは今日の臨床病理学が“生の感覚”のみにたよる診察作法の到達し得る限界を痛感し、それを基礎医学に用いられている知識・技術および器械の活用によってレベルアップさせるのに大きい貢献をしている。そしていまや何かの領域で基礎医学の知識と技術を身につけていない臨床家は、患者を診療する一人前の医師として通用しない時代になってしまった。本書を分担執筆しておられる方々は、いずれも臨床もできれば基礎もできる“水陸両用”の活躍しておられる方々であるから、本書の内容がすぐれており、臨床家の“役に立つ”ことを保証できる。

そういう点で私は本書を良書の1

つとして推奨すると共に、次の方々には是非通読をおすすめしたい、私はもちろん精読させていただくつもりである。

1. 医学生に——現代の臨床医学（ことに内科学）は基礎医学の知識を最低限身につけ、病気の本態を理解していれば“症状”、“治療”などを演繹することができ、機械的に暗記しなくてもよいところまで進歩している。この書物は基礎医学の最少限を明示しているので、学生が勉強するとき大いに時間と労力を節約できる——“病態生理と検査”の部分を読み。

2. 医科大学を卒業後10年以上実地活動をつづけておられる医師の方々に——現代臨床医学が診断の方面でどれほど変化したかがわかっていただけることだろう。殊に医療保険の審査員をしておられる先生方は是非お読み下さるようお願いしたい。

3. 基礎医学の教員の方々に——医科大学で医師を養成するために基礎医学のどこに力を入れてどこから力をぬいていか判断をしていただく参考書として本書を活用していただければよいと思う。臨床家が到底教えることのできない本当の基礎的知識を叩き込んでいただけたら、どのように有難いことであろうか。

4. 中央検査部の医師に——中央検査部で働いている人々は医師も技術員も“何でも屋”であらねばならない。自分が特にならずわっている臨床検査部門以外のところで、どのように進歩しているか本書によって知っていただきたい。

最後に私はこの「臨床検査診断学」が基盤になってわが国の医科大学に“検査診断学”の講座が開設され、中央検査部を活用し、臨床医学のレベル向上に一層役立ってくれる日がはやくくるように心から祈っている。

B 5 / 頁650 / 図282 / 表347 / 写真3 / 1976 / ¥7,500 / ¥300（医学書院刊）